

課題番号31

ナタネの安定生産（令和3年度～）

～新たな耕畜連携による資源循環への貢献を目指して～

対象：栽培農家37戸

1 活動の背景

空知本所管内では、輪作品目のアイテムとしてナタネが導入されたが、全道作付面積の約6割を占めるまで拡大・定着している。国内のナタネ栽培技術資料は殆どないため、地域で試験を実施し集積したデータを活用しているものの、他品目と比較し農業者により栽培管理の差が大きい。

また、これまで国産ナタネの主流品種は「キザキノナタネ」であったが、種子中のグルコシノレート含量が多いため、搾油後の搾り粕は飼料として使用できず、農業現場では肥料用としてのみ利用されてきた。しかし、令和2年に農研機構が「ペノカのしずく」を育成し、管内においては令和5年のは種から全面切り替えが決定し、活用場面の拡大が期待される。



写真1 ナタネ栽培ほ場

2 活動の経過

【事例 1】JAいわみざわナタネ研究会

令和3年度に、JAいわみざわナタネ研究会会長とJA事務局から栽培管理の平準化に関して普及センターに相談があった。そのため令和3年度冬季に、研究会員を対象にはじめて座学研修会を開催した。相談の内容から「施肥管理」「病虫害防除」の基礎知識について講習を行った。なお、令和4年度も再度、座学研修会の要請があり「土づくり」「土壌診断に基づいた施肥」「ペノカのしずく」について講習を行った。



写真2 ナタネ研究会座学研修会で施肥指導

【事例 2】JAいわみざわナタネ研究会会員 A農場

A農場は地域にナタネが導入された同時期に栽培を開始した。農場主は近年、収量の年次差が大きいことを悩んでいた。冬季の座学研修会後に農場主から要請があり、JA事務局、普及センター地域係一堂に会して、意見交換やほ場確認を行い今後の方向を決定した。最初に、土壌診断を行った結果、生育不良の1要因が確認でき、今後の改善点を見いだすことができた。

【事例 3】JAびばい B農場

B農場は、美唄市のナタネ導入に尽力した農業者である。「ペノカのしずく」全面切り替えに向け、栽培方法の整理が必要と感じていた。令和3年度から、農場主、JA、普及センター広域畜産主査と「ペノカのしずく」における「栽植密度」と「施肥管理」について検討した。

3 成果の具体的内容

【事例 1】JAいわみざわナタネ研究会 適正管理実施による安定生産

(R3年 20戸→R4年 25戸)

研修会で土壌診断に基づくほ場のpH矯正の必要性や基肥施用が理解され、不足要素の補給が行われた。適正施肥実施の取り組みだけでも27戸になり、目標を達成した。

【事例 2】JAいわみざわナタネ研究会会員 A農場

農場主、JA事務局、普及センター地域係と、土壌採取を行い診断を行った結果、生育不良の1要因が確認でき今後の改善点を見出すことができた。

またJA事務局から「普及センターと情報と行動の共有ができていたので、秋季の急な生育不良時にも予測がつきタイムリーにFAX情報を発信できた」との声が聞かれた。

【事例 3】JAびばい B農場

「ペノカのしずく」の栽培方法を検討した結果、農場主から「これまでの施肥管理で対応できる」「栽植密度の再検討を行いたい」との声が聞かれた。令和4年度は種作型では、栽植密度の検討を実施することとなった。

【共通】情報共有を目的とした情報発信

(R3年 1回 → R4年 2回)

情報共有を目的とした情報発信は年5回となり、目標を達成した(夏季現地研修会1回、冬季研修会1回、打合会議3回)。

4 今後の課題と対応

- (1) 令和5年度から北海道農業研究機構で「ペノカのしずく」に適した肥培管理の検討が開始される。関係機関と先行して実施している施肥試験の経過や栽培実態の情報提供を行い、スムーズな実用化にむけ地域で情報共有を図る。
- (2) 輪作、水田活用におけるナタネに対する微量要素を含めた施肥改善を行う。



写真3 B農場に設置の検討ほ場
(JAびばい・普及で収穫時合同調査)



写真4 農業者と関係機関とで情報共有
を図り栽培技術確立を目指す



写真5 関係機関で共同調査